
ベネグロワの滴り ~ 偽幸 ~

一言 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベネグロワの滴り ～偽幸～

【Nコード】

N6288E

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

『ベネグロワ』が突如地球へ降り立つてから、はや数十年。青年は、これまで職場を転々とし、落ち着かない憂鬱な人生を歩んできたが、今になってようやく幸福を手にした。だが、その幸福は、実はあまりに不確かで歪なものであった。その歪さを自覚した時、青年は。宇宙からの侵略が地球上で進行する中、三人の主人公がそれにどう関わり動くかを描いた、三編にわたるSF連載小説。

第一項

あれは、本当に夢だったのだろうか。ふと、そう思うことがある。

僕はいつか、大きな光を見た。

その光は頭上で輝き、まるで僕をじっと見下ろしているかのようで、直視することができないほど眩しかった。

そうして、その光に照らされているうちに、次第に体の中に得体のしれない何かが入ってきたのを感じた。

それが、体の隅々まで広がっていくに従い、心地良い感覚に包まれていったことを覚えている。しかし、その感覚はしばらく経って突然消えると同時に、光が遙か上へと消えていったのだった。

神様がいるかどうかなんて、わかるはずはないし、そんなことは興味はない。だが、この世に神秘があることは事実だと、あの時から、信じるようになった。

しかし、あの光は、僕の前にはただ現れただけではなかった。

あの光は、闇を彷徨っていた僕に、幸福を与えてくれた。だから、『幸福の光』と僕は名づけ、呼んだ。しかし、もし他人が僕と同じ体験をしたなら、あるいはこう言うかもしれない。

『奇跡の光』、と。

「やっと……終わったか」

そう言ってボタンを押すと同時に、ディスプレイが暗くなる。画面に映った自分の欠伸した顔を見ながら、大きな背伸びをする。

「お疲れさま」

その声に、椅子をくるりと回転させて振り向くと、ショートヘアの若い女性社員が微みながら、両手に持った紙コップの一つを手渡してきた。

「……ありがとう」

受け取りながらそつと視線を上げる。

彼女の顔。分けた前髪から広いおでこのぞき、形の良い眉毛と口元のほくろが、印象的だった。

僕は受け取ったカップに一口付けると、ふう、と小さく息を吐いた。そして、ふと辺りを見渡す。狭い社内にはいつの間にか他の社員の姿は消え、静まり返っていた。

「……残ってるのは僕と伊藤さんだけか」

その僕の独り言を流して、

「あなた、遅くまで頑張るわねえ」

伊藤さんは、僕の机に片手を付きながら、癖なのか、自分の前髪を指で撫でながら言う。

「……実を言うとな、今日はこれでも早く終わった方なんですよ」

僕はそう言っ、もう一口。すると、

「毎日こんなに遅いの？」

「僕ばかり足を引つ張る訳にはいきませんから。皆と同じ線の上に立つには、これくらい努力しないと」

「どこかで足を引つ張っているのは、皆、同じことよ」

僕は、ええ、と頷き、目を伏せ、

「そうでしょうね。……だけど、僕の場合は、とび抜けてそうだから」

「責任を感じてるの……？」

「そうかもしれない。……けど、この頃は、こうして努力するのも、楽しいと思えるようになった」

伊藤さんは、わずかに首を傾げ、「楽しい？」とつぶやいた。

「ええ。今の環境がとても気に入っているんです。だから、不思議と頑張れる」

僕はそう言っ、一気に飲み干し、コップを空にした。喉を通った熱さが、胃を中心に、じわじわと広がっていく。

暖かい息を吐くと、コップを折りたたみながら立ち上がり、近くのごみ箱へ入れ、伊藤さんに振り向く。

「帰ります。コーヒー、ごちそうさまでした」

軽く会釈し、デスクの上の鞆を取って、扉へ歩き出そうとする。その時、

「待って」

背中から、呼び止める声がかかった。

「……なんででしょうか？」

振り向いて、彼女に向き直る。

「この後、ちよっと付き合ってくれない？」

意外な言葉を聞き、「え？」と思わず声を上げたが、すぐに嬉しさに

頬を緩ませて、

「良いですよ」

と、言う。人からこうして誘われるのは、久しくなく、わずかな興奮を覚える。

伊藤さんは、安心したように、目を細め、

「お気に入りのところがあるんだけど、行かない？」

と、耳にかかった黒い髪を掬いながら、どこか弾んだ声で訊いてきた。

喜んで、と僕は笑い返した。

第二項

会社を出て、夜の涼しい空気に触れる。

会社の前の道路の先には、大きな公園があつた。薄暗い街灯の光が、公園沿いの道に植えられた木々の影を、地面の上に伸ばしている。

二人でそこに並んで立ち、ぼつぼつ会話を交わしながらタクシーを待つと、程なくして来た。

乗り込み、発車すると、僕たちは無言になる。

僕は窓の外をぼんやりと見つめた。街灯の光の帯が車内を通り過ぎるたびに、窓ガラスに自分の顔が浮かび上がった。眼鏡の奥で、しばたいている目は充血し、肌は青白く、明らかにやつれていた。視線を感じて隣を見やると、伊藤さんが、眉をひそめながら僕の顔をじつと見つめていた。

伊藤さんは、「もしかして」とつぶやき、

「……昨日、徹夜したの？」

と訊いてきた。

「しました。……わかりますか？」

「大変だからって、頑張るのもほどほどにね。身体を壊したら、もっとひどいことになるわ」

伊藤さんの心配そうな強い声に、僕は、優しい人だな、と苦笑する。

「……その通りです。よく肝に銘じておきますよ」

そうつぶやいて笑うと、

「……嘘。全然懲りてなさそうなもの」

と、伊藤さんは僕の方を向いたまま、自分の頬に片手を当てて目を瞑り、溜息を吐いた。

再び僕たちは沈黙する。

窓から、薄いオレンジの光が差しってきて、身にまとっていたスー

ツに染み込む。外を見れば、街中が、淡い色に霞んで見える。

と、その時、窓の外や車内が、一様に真っ暗になった。その暗闇を車は走り続け、再び、淡い光が照らす場所に出た。後ろを振り返れば、巨大な影が遠ざかっていく。

ビルのようなその黒い建造物は、夜空へと果てしなく伸び、溶け込んでいた。ベネグロワだ。

ベネグロワは、街の各所にそびえ、その長い影によって、周囲の建物を黒く掻き消し、街中を薄暗くしている。

毎日のように見慣れているものだが、意識せずにはいられない。

現代人にとって、脅威の象徴だ。

隣の伊藤さんに視線を移すと、彼女も、反対の窓から、唇を引き結んで、じっとそれを見ていた。僕は目を閉じ、息を吐く。

「『沈黙の巨人』、か」

口からぼつりと、つぶやきがこぼれる。

「あれは、いつ消えるのかしら」
伊藤さんも、窓の外を睨みながら、小さくつぶやく。

「この大地がなくならない限り、消えませんよ、きつと」

数十年前、この惑星に宇宙人類が乗り込んできた。

彼らからすれば、それは挨拶程度だったが、今まで宇宙人類と触れ合うことのなかった人類は、その存在に驚愕し、恐怖を抱いた。

宇宙人類は、人類の代表と話し合い、高度な技術を提供する代わりに、この惑星の、ただ一つある大陸の中心部に、集中的に、超高層ビルを建て始めた。

それは、容易に空を貫くほどの高さがあり、地上には日の光が届きにくくなった。日中でも街は薄暗く、活気がなかった。

そのビルの壁は、鉄とも石ともつかぬ、未知の材で構成され、掠り傷一つ付けることができなかった。

人類には、なぜこんなものを建てるのか、当然理解できなかった。だが、詳しい説明はされず、宇宙人類は、今もなお沈黙し続けているのだった。

僕は窓に顔を近づけ、首を傾けて、視線を徐々に上へと伸ばす。入り口もない。窓もない。ただただ巨大なだけの、黒い塊。もはや、眺めるだけのものに過ぎなかった。

人々はいつしか、これをランブル古代語でこう呼ぶようになった。ベネ（沈黙の）、グロワ（巨人）と。

ベネグロワの、有無を言わせない存在感から目を伏せるように、人々は、それに対する興味を、恐れと共に意識の底へ沈めていった。「本当に、何なのかしら、あれは」

かすかに怒りに震えた声が、背後から聞こえた。

僕は窓から顔を離し、振り返って苦笑する。

「それは、愚問でしょう」

そう返した後、僕は視線を、無表情で外を見る伊藤さんの横顔から、再び窓の外に逃がす。

……聞かずとも、もう知っているじゃないか。あれの正体など、絶対に解らないということが。

第三項

バー、だった。

ここが、彼女のお気に入り入りの店らしい。人目につかない場所に位置し、店内にも目立つものは何もない。一様に、シンプルだった。

「センス悪いかしら」

僕が店内を眺めているのが気になったのか、伊藤さんが苦笑しながら言った。

「いえ。こういう店の方が落ち着きます」

「理由を聞きたいわ」

「何もないってことは、それだけ気分を楽にすることができると思っ
うんです」

「おもしろいこと言うのね」

「そうかな。……変わったお酒ですね」

透明のガラスに注がれた無色の液体を一口飲んで言った。

伊藤さんは、「そうでしょう?」と、微笑む。

「こんなもの、どうやって作っているんです?」

「オリジナルがあるの。これは、5世紀ほど前のそれを、複製した
ものよ。当時の製造方法は、詳しくはわからないんだけど」

「五世紀前って、まだ大陸が残っていた時代じゃないですか。今の
ような擬似大陸とは違う、本物のね」

「思わぬ掘り出し物でしょう?」

「こういうのが、出回っているとは知らなかった」

グラスの中の液体を少しずつ、味わうように飲んだ。濃厚な香りが、鼻を刺激する。

「普通のと比べて、どう?」

伊藤さんの言葉に、僕はグラスを仰ぎながら頷き、「これは、う
まい」と口を離して言った。

テーブルに下ろすと、底をわずかに浸す液体が、波のように揺れ

る。

「この味は、素直だ。現代の酒の、科学的な味とは全然違う」

すると、伊藤さんは、口元に手を当てて、声を上げて笑った。

「本当に面白い人ね。その答え方は、きつとあなたにしかできない」
可笑しそうに笑う伊藤さんを見て、僕は後頭部に手を当て、苦笑いをした。

「前は、どんな仕事をしていたの？」

「物流会社に勤めていました。その前は、精密機械の工場。どれも、長くは続かなかった」

「……そうなの。私も、去年から今の会社で働き出したの」

「それは意外だな」

「それまでに、いろいろあつてね。本当に大変な想いをしたわ」

「誰でも、そういうのはあるんですね」

「あなたも、今のところに来る前は大変だったんでしょ？」

「ええ、もちろん」

こんな僕ですから、と自嘲気味に言った。

「仕事ではミスばかり。どの会社も、クビですよ」

「ロゴスさん。そんな風に言わなくても……」

伊藤さんは、少し怒ったように言う。

「だけど、事実でしょう。今だって、皆の足を引っ張っている。……」

… 本当に重い事実ですよ。だからこそ、僕は努力するんです。こんな自分を変える為にもね」

酒を一気に飲み干した。胃が焼けるように熱くなる。

「今の会社の同僚は皆良い人達ばかりだ。こんな僕でも、仲間として見てくれている。だからこそ、頑張れる」

伊藤さんは思案げな表情で遠くを見ながら、そう、とだけ答えた。
そして、

「少し私に似ているかもしれない」

とつぶやく。

「僕がですか？」

「うん。……私もね、自分を変えたい。働き始めたのも、過去を捨てて、やり直そうって思ったから」

何かあったんですか、と訊こうとして、口をつぐむ。相手を気遣うあまり、気持ちをうまく表現できず、あてのない手が、自然とグラスへ伸びる。

「聞きたい？」

伊藤さんが、僕の顔を覗き込んで、ふとそう言った。伸ばした手をぴたりと止め、僕は顔を上げた。

「正直、聞きたいかな」

「他言はしないでくれる？」

「もちろん」

伊藤さんは、顎に手を当てて、視線を上に向けて考えた後、「証拠を見せてもらえる？」

と、訊いてきた。

「証拠、ですか」

「あなたの事、聞かせてくれないかしら」

僕は首を振って、答える。

「……おもしろくないですよ、きっと」

「いいのよ。話して頂戴」

じつと見つめてくる伊藤さんに、僕は静かに息を吐き、

「わかりました。……そうだな、今の会社に入る前のことを話そうか。たぶん無理だろうけど、驚かないで聞いてくれますか」

「ええ」

「……僕はね、」

第四項

唇から、顎を伝って滴り落ちる、赤い雫。

それは、地面に斑点を作った。だが、降りしきる雨が、その色をすぐに消し去ってしまう。

唇から溢れ出す血を腕で拭った。

殴られた背中が少し痛んだが、幸い、雨の冷たさが痛みを麻痺させてくれる。

雨が、とても心地良かった。

僕という存在のすべてを、流し去ってくれるような気がした。

喧嘩したのは、久しぶりだ。学生の時以来か。いや、今日のは喧嘩とは呼ばないな。一方的に殴られ続けていただけだったから。

昔から、絡まれることが多かった。そのたびに逃げてきたが、今日は何故か逃げる気にもならなかった。

「僕は……」

人気のない路地裏で、壁に寄りかかりながら、黒い空を見上げた。

落ちてくる雨水が、眼鏡に当たって四方に弾け飛ぶ。

「僕は、頑張ったさ」

頑張ったが、駄目だった。今度の会社も、クビになった。当然と言えば、そうかもしれない。

ミスの続出は、他ならぬ僕の責任だ。それでも自分なりに頑張ってきたんだ、と言うのは単なる言い訳か。

「疲れたな」

……心の中が、空っぽだった。数時間前まで怒涛のように押し寄せていた感情が、不思議と今は思い出せない。

ただ、雨が冷たいのと、口の中に血の味が残っているのを、ぼんやりと感じていた。

溜まっていた血を吐き出すと、よろよると歩き始めた。

どこからか、笑い声が聞こえてくる。

男か女かさえ解らない、嘲笑を含んだ、耳障りな声が。

辺りを見回すが、誰も居ない。そうやって確認すると同時に、その『雑音』は消え、雨粒が地面に弾かれる音だけが聞こえる。

「疲れているな」

軽く頭を振って、妄想を薙ぎ払った。

長い間、雨に打たれたまま、薄暗い路地裏の道を歩いていた。

ふと、立ち止まった。

足元に大きな水溜りがあった。それに映っているのは、たくさんの顔。けらけらと笑っている。

またか、と思い、足でそれを踏み潰した。

額に黒い水がかかったが、構わず歩き出す。

とつとつ僕の世界が狂いだした。

ふと周囲を見渡すと、大勢の人に囲まれている。手でそれを振り払っても、今度は耳から笑い声が聞こえてくる。

被害妄想に取り憑かれた僕は、妄想と現実の境界が曖昧になっていた。

手は妄想を振り払うため、足は踏み潰すために存在しているようにさえ思えてくる。

いや、これは妄想なのか？ 現実と、何ら変わりはないのではないだろうか。

気が付けば、橋の上を歩いていた。消えかかりそうな電灯が、わずかに足元を浮かび上がらせている。

橋下の、湖の水が蠢く音が、頭の中にまで反響してくる。

突然、前方から眩しい光が近づいてきて、思わず目を細めた。

橋の向こうから姿を現したのは、赤いオープンカーだった。両目をぎらつかせて、こちらに疾走してくる。

僕はその場に立ち尽くしたまま、動けなかった。運転手は、僕の存在に気づいていないのか、そのまま車は突き進み、程なくして僕の身体は弾けとんだ。

第五項

「もう、歩けないか」

息が荒い。足はもはや動かず、僕は欄干に寄りかかった。

真っ赤になった頭を、後ろに振り向かせる。赤い足跡が続いていた。

僕は欄干から頭を垂れ、橋の下で静かに揺らぐ湖を見つめた。

真下の水面が、小さな波紋を広げて、赤色に染まっていく。

視界が傾いたかと思うと、欄干から身体が滑り落ちた。背中に、弾かれるような痛みが走る。だがそれは一瞬で、すぐに体が柔らかい感触に包まれる。

周囲の深い闇をぼんやりと見つめながら、こうして死んでいくことが、自身を救うことのできる唯一の方法なのかもしれない、と気づいた。僕は、運命に感謝した。

闇へ。僕は沈んでいった。

気がつくと、霧がかかった空間の中にいた。音一つない、静かな空間。

その中で、太陽のように僕を照らし続ける光があった。それは静かに、そして優しく僕を見下ろしていて、その光の熱は暖かった。しかし同時に、直視することができないほど眩しく、神々しかった。夢か、と思ったが、意識は明瞭で、間違いなく現実だった。

白い霧と、光の世界。

霧は、黄金に照り輝いていた。そして、僕も金色に染まっていた。その時、何かが体へ入ってきて、僕は声を上げた。指や足の先から、ゴンゴン、と鈍い音を立てて滑り込んでくる。

その音とは対称的に、心地良い感覚が全身を満たした。

それは暖かくて柔らかく、中へ進み入ってくるにつれ、僕は歓喜に襲われた。

力がどこからともなく湧き、全身から噴き出しているような気がした。

その時、突然、光が上空へ向かって、遠ざかり始めた。同時に、頭を埋め尽くしていた陶酔感が消え、体内を何かが移動する違和感が消えた。

僕は手を伸ばし、叫ぶ。

行かないでくれ。

それはゆっくりと離れていき、やがて消えた。その途端、霧が散り、闇が再び僕を包んだ。

目を開くと、真っ白な世界が広がっていた。眩しさに、目を覆い隠しながら、起き上がった。

次第に、真っ白な世界が、色のある世界へと変わっていく。

……どこだ、ここは。

真っ白な壁に、真っ白な天井。清潔そうな感じがする。きっと病室だ。

部屋の中心にあるベッドに、僕は居た。

……今のは、夢だったのだろうか。

眠りから覚める前に、既に目覚めていたような気がする。今の夢は、それほどリアルだった。

ベッドの横に、小さな机があり、その上に、デスクトップパソコンが一つ、置かれていた。

ベッドから降りると、足の裏から冷たい感触がした。僕は素足のままで、身には患者服をまとっていた。

冷たい地面を一步進み、少し屈んでパソコンの画面を覗く。

そこには、真っ白な背景の上に、こう書かれてあった。

『お目覚めか。』

その下に『Yes/No』とある。

……これは、僕に？

マウスを掴み、『Yes』をクリック。

すると、すぐに文字は消え、新しいのが浮かび上がる。その下にも、やはり『Yes/No』とあった。

『気分は、良好か』

今の気分か。まあ、適当に答えれば良いだろう。

『Yes』。

『身体に、違和感はないか？』

『Yes』。

『ここに運ばれる前の記憶はあるか？』

……ある。

僕は夜の街を歩くうちに、橋の上だっただろうか、車に轢かれた。

そして、湖の底に沈んでいったはずだ。あの深い、永遠の間は鮮明に思い出せる。

だが、僕はまだ、ここに存在している。

ただ、『生きて』はいない。画面に映る自分の目は、まるで魚のそれだった。つまり、死人のそれ。

僕はまた、この現実という袋小路に放り込まれてしまった。死をもって救われたいという願いは、砕け散った。

僕は、自らの鼓動と共に、あの圧迫感が再び積み重なっていく音を、感じていた。

その時、ふと気付く。会社をクビになったことを。また探すのは、面倒だとうな垂れる。

『質問はあるか？』

『Yes』。

画面上に、文字と共に現れたフォームに、質問を打ち込んでいった。

そして、『送信』をクリックすると、すぐに返事が返ってきた。

「……ふむ。見ての通り、ここは病院だが。湖岸で、血だらけになつて倒れていた君を発見し、なんとか一命を取り留めさせることに我々は成功したんだ。事故による後遺症はない。安心したまえ。君の情報も、調べさせてもらった。クビになったそうだね。それに君、家賃を支払っていないそうじゃないか。……そんな君に、我々は職と住居を用意しておいた。何か、依存はあるか？」

驚いた。

病院が、二つ揃えて与えてくれるなんて、聞いたことがない。

そんなうまいことあるものか、と再び質問を打ち込む。

「何、我々も本業があるし、いつまでも君を保護してはられないのでね。ちよつとした奉仕だと思つてくれればいい。我々は、有り余るほどの財を持ち得ているからね。では、そちらに管理者を一人向かわせるから、早急だが、出立の準備をしておいてくれ。では、またいつか。」

ほどなくして、鍵が解かれる音がして、スーツ姿の男が一人、入ってきた。

渡された、新しいスーツに着替え、不思議な心持ちで部屋を後にする。

男の背中を見ながら白い壁に囲まれた廊下を歩き続けていると、やがて玄關に到着した。

男は書類を僕に手渡し、新しい住居のことや、職業について、簡潔に説明した。

目を白黒させながら、話を聞き、詐欺か、とも思ったが、どうやら本当に奉仕がしたいらしいかった。

男が、何か依存はないか、と聞いてきて、僕は、すぐに承諾した。男は、必要品の詰め込まれた鞆を手渡して軽く礼をし、立ち去るうとした。

その時、僕は今更ながら、ある事を聞いていないことに気づいた。待つて下さい、と引き留める。

「事故から、どれくらい経つたんですか？ 今日は何日？」

男の背中にまくし立てると、男はぴたりと足を止めて、振り向いた。そして、僕が眠っていた時間を、微笑と共に口にした。

僕は固まったまま、その場に立ち尽くした。

自分の足を見た。腕も見る。そうして正常な肉体であることを確認する。

事故から『7時間後』の現在、肉体には傷一つ残っていない。

あの時は、あんなに血まみれだったのに。

第六項

入社した。例の病院の推薦で。

正直、あまり期待はしていなかった。その代わりに、緊張が胸を締めていた。

入社してしばらく経ち、大きなミスをした。

ミスという言葉に過剰反応する僕の頭は、言い訳と体裁を考えるのに必死で、そんな時の呼吸は、うるさいほどに荒かった。

だが、そんな僕に対して、仲間が投げかけた言葉は、涼しげだった。

「終わったことは仕方がない。頑張れ」

胸に何かが刺さったような心地がし、それは、快感にも似ていた。今までどんな会社にいた時も、そんな言葉は聞いたことがなかった。

同僚の表情はいつも固く、僕自身もそうだったに違いない。だが、ここで働く人は温かくて柔らかかった。

緊張している僕に、気さくに声をかけてくれたり、慣れない仕事について、説明をしてくれたり、とその気遣いが嬉しく、気づけば、自然と笑っていた。

人生が百八十度変わり、楽しくなった。

相変わらずミスはするし、つらくあたられることもあったが、楽しかった。

何故こんなにも楽しいのか、よくわからない。

闇に光が差した、とはこのことを言うのだろうか。

そんな中、ふとあることに気づいた。

この幸福は、あの不思議な光がもたらしてくれたのではないだろうか、と。

あの時から……あの光に照らされた時から、僕には幸せが付きまとうようになった。そう信じるようになった。

僕が息を吹き返したのは、幸運のおかげ。楽しく生きていられるのも、幸運のおかげだ。

それらの幸運が、僕に憑いているのは、きっとあの大きな光が、幸福を呼ぶ光だったからに違いない。

あの時、体に入り込んできた神秘的な何かが、体内でまだ渦巻いているような気がした。

「神秘体験か。こうして聞かされても、全然実感が湧かないのよね」
僕が一通り話し終えると、伊藤さんは驚いた素振りを見せるわけでもなく、ただ素直な感想を口にしたようだった。

軽蔑されるのを覚悟していたのだが、なんだか意外だった。

伊藤さんは、続けて話し出す。

「仮にそういう体験が事実であったとしても、私が実際に自分で体験しないことには、ただの知識でしかないわけでしょ？……でも、もしそれを体験することができたのなら、その瞬間に、私の世界は変貌するのかしらね」

「そうですね……世界の見方が変わるんですよ。自分がどれほど狭い見地で世界を見ていたかを実感する、ということですよ」

「なんだかよくわからないけど、私は知識の領域から出れそうにないわ」

「出れない、と言ってしまったらそれまでですよ」

僕は話すのを中断して、ウイスキーにようやく口を付けた。少し饒舌になりすぎたかもしれない。

「今の話は、信じなくても結構ですよ。……つまらなかつたでしょう？」

「いいえ。むしろ、」

伊藤さんは、首を振った。

「他人の人生をこんな風に言っているのかはわからないけど、……」

とても面白かったわ」

「……それは、良かった」

僕は、苦笑しながら言った。

「一つ聞きたいんだけど、その病院、どこにあるの？ とてもそんなところがあるとは信じられないんだけど」

伊藤さんが頹杖を付いて、考える素振りを見せつつ、言った。

「本当にありますよ。東地区に」

「奉仕団体かしら。もしかしたら、宗教団体かもしれないわね」

「というと？」

「身体に、変なことされなかった？ 寝ている間に薬を投入される、なんてこともあるかもしれない」

「……怖いな。僕は、騙されたんだろうか」

「大体、事故から七時間しか経過してないのに身体は無傷、なんてあり得ないでしょう。確かに、先端医療技術を駆使すれば、不可能じゃないわ。でも普通、そんな大金出してまで、見ず知らずの男を救おうとする？」

伊藤さんは、心配そうに言った。まさか、僕が数日前に事故に遭い、生死の狭間から息を吹き返したとは、考えられなかったのだろう。顔に出していないだけで、実際はものすごく驚いているのかもしれない。

「まあ、結果的に、あなたは助かったんだから、良かったのだけけれど」

「……そろそろ話を変えましょう。なんだが、頭が痛い」

「なら、無理して話さなくても良かったのに」

伊藤さんはそう言って、頭を片手で押さえて俯く僕に、冷水の入ったコップを手渡した。僕はそれを受け取り、

「僕は、誰かに知ってもらいたかったんだと思います。この非現実的な体験をね」

と苦笑しながら、言った。

しばらくお互いに口を開かなかった。

ひとまず落ち着く必要があることを、僕たちは、お互いにわかってきたようだ。

時折酒に口を付けながら、黙って目を合わせる。しばらくこのままでいようと、暗黙の了解が交わされた。

先ほど伊藤さんが、私達は似ている、と言ったことを思い出す。

確かに、その通りかもしれない。

「じゃあ、今度は私が話す番ね」

伊藤さんが、長い無言の時間を経て、やっと口を開いた。

「……ええ。お願いします」

僕は、グラスをテーブルへ置き、彼女に向き直った。

「単刀直入に言つとね、」

「はい」

僕が頷くと、伊藤さんは大きく息を吸い、目を閉じた。そのまましばらく経って、決心したように目を開き、

「私は、犯罪者なの」

と小声で言った。

彼女は、人を殺したことがある、と言った。結婚の約束をしていた男とトラブルを起こし、激昂した結果、殺害してしまったらしい。軽蔑してくれてもいい、と彼女は言った。

驚いたが、彼女を責める気持ちは湧かなかった。

何故なら、僕も多くの苦痛を味わってきたから。苦痛の末に、殺人を犯そうとする考えが浮かんだことがあった。それを実行に移さなかったのは、それに対する恐怖を感じられるほど、まだ頭が冷静だったからだ。

彼女は、憎悪の荒波に飲まれたまま、『殺人を犯せ』と、頭で反響するその呼びかけの成るがままに、行為を実行した。

その罪は、一生背負っていくものだ。だが、

「どうして、そんな事言うんですか」

薄く涙を浮かべた目を、伏せていた彼女は、「え？」と顔を上げてつぶやく。

「どうして、僕があなたを軽蔑する必要があるんです?」

「だって、私は、」

「人を殺した。……でも、罪を認め、背負い、二度と過ちを繰り返さないと誓ったんでしょ? そんな人を、軽蔑することは僕にはできない」

「優しいのね」

「優しいと同時に、厳しいと思って下さい。同情なんてしない、ということですよ。罪は罪として、あなたが一生背負っていくものだ、という僕の意見です」

伊藤さんは、両目を片手で覆い、「そうね」と唇を笑わせてつぶやく。

「……あなたに話してみても良かったわ」

「ええ。僕なんか話してくれて、ありがとう」

「あなたにだから、話せたのよ。あなたが、私に似ていたから」

そう言って、伊藤さんは顔から手を離し、その濡れた指で、僕の手をそっと握った。

第七項

その夜、僕と彼女は親しくなった。

僕達は似たもの同士で、傷を舐めあっているのか。

……違う。僕は、彼女と話していて、素直に楽しかった。一緒に居るのがお互いに楽しかったから、自然と親しくなったんだ。

扉を開けた途端、強風が身体を押し返してきて、うわ、と思わず声を上げる。

「風、強くなってるな」

夜は更け、バーを後にした時よりも、風はまた一段と強くなっていた。

「じゃあ、また明日ね」

「ええ。今日はもう休んでください。明日も早いから」

「そのつもりよ。もう眠くて、足がふらふらしているんだから」

そう言って、伊藤さんは、玄関に立ちながら、大きな欠伸をした。僕はじゃあ、と軽く手を振ると、外に出て、アパートの前に停車しているタクシーに、急ぎ足で近寄る。

乗る前に、もう一度振り返ると、伊藤さんは眠そうな顔をしながらも、戸口に立って、手を振っていた。僕も振り返す。

本当はもう少し話をしていたかった。しばらく立つたまま、彼女を見つめていたが、名残惜しさを振り切って、中へ乗り込んだ。

帰り道、タクシーの中で一人、数時間前までの出来事を振り返り、頬を緩ませていた。

伊藤さんとこんなに親しくなれるとは、思っていなかった。

ふと、これもあの光がもたらしたものに違いない、と無意識に考えている自分に気づく。

何もせずとも、幸福が転がり込んでくるような気がした。

そして、その幸福が訪れるたびに、あの光が実在するという、確

信が深まっっていく。

運転手に肩を揺らされ、目を覚ました。自宅の前だった。

タクシーのエンジン音が去ると、通りは静まりかえった。顔を上げ、入居者のあまり居ない、新築マンションをぼんやりと見上げる。僕の部屋は六階にある。

玄関に入り、エレベーターのところまで行くと、先客が居て、今にも扉が閉まるところだった。その女性は、急いで走ってくる僕に気づき、待っていてくれた。

「すみません」

軽く頭を下げて、扉をくぐる。

他の住人と顔をあわせるのは珍しいな、と思いつつ、壁に寄りかかる。扉が閉まり、動きだした。

僕は毎日、早朝に出て、深夜に帰ってくる。寝る時間はほとんどないが、そんな生活を送っていても、何故か、活力が尽きることがない。底のしれない、このやる気は、一体、どこからきているのか。精神が衰弱しないよう、不思議な力に守られているのではないか。そんな気さえする。

壁に身を預けて考え事しているうちに、いつの間にか、六階で止まっていた。隣に居たはずの女性は、とっくに下の階で降りたみたいだ。

眠気を我慢し、歩き出す。酒のせいもあるのか、足元がふらつく。611号室の前まで来ると、靴から鍵を取り出した。そして、鍵穴に差し込んだが、何故か回らない。

ノブを握ると、鉄が軋む音を立てて、扉が開いた。

その途端。

背筋を何か冷たいものがすっと撫でていった。

……誰かが、いる。

靴を脱いで上がり、板張りの廊下を静かに歩く。床がきしむ音が、小さく廊下に響いた。

そして、奥の部屋の開かれたドアの隙間から、中を覗こ。そこには黒い影が立っていた。

その影が、首をこちらに向けた。

その瞬間。突風が吹いた。

「あ」

声にならない叫びが口から漏れる。

ぼとり、と重たい音が、静かな廊下に響き渡った。

ゆっくりと視線を下げ、落ちたものを、確認する。

腕だった。

「あ」

ただ啞然とした。そこに転がっている物体は、一瞬前まで、僕の身体の一部だった。だが今は、手に取ることが出来る『モノ』に過ぎない。

左腕を見ると、いや、見たつもりだったが、実際そこにはもう、何も付いていなかった。

血が噴き出たが、すぐにその勢いは弱くなり、そして止まる。腕を切られたにもかかわらず、もう流れていない。

危つく意識が遠のいた。それは腕を失ったから。違う。流れ出るはずの血が、止まったから。それも、違う。

その切断面を見たからだ。

「何だ、これは……！」

切断面からは、骨でも肉でもなく、機械がのぞいていた。

……機械。鈍い光を放っているそれは、機械としか言いようがない。

身体は、物質。モノだ。モノの範疇を超えないから、変容せざるを得ない。言い換えれば、変容することが出来る。

だが、僕の身体の変容ぶりは、全く想像を絶するものだった。

……機械が入っている、なんて。

「気づいてなかったのか。いや、気づかされてなかったと言うべきか」

目の前の黒い影が声を発し、ゆらりと揺れた後に、こちらに一步近づいた。

「通信装置を壊させてもらった。何、腕がなくても生きていられるだろう。……別に生かす気はないがな」

男はまた一步近づいた。

窓から差し込むわずかな光が、男の顔を浮かび上がらせる。だが、今は、男の事なんてどうでも良く、僕の目は、切断された腕に釘付けだった。

腕の中に入っているこれは、一体何だ？

まさか、こんなものが身体中に群がっているとでもいうのか。

残っているほうの腕が、震えていた。ガチャガチャと機械が揺れる音が聞こえてくるような気がする。

「簡潔に言う。お前は機械化された人間、サイボーグだ。確かに、そのおかげで今お前は生きていられる。だが、機械化された以上、

『奴ら』にかげられた首輪は簡単に取り外すことはできないだろう。

つまり、現在、お前という存在は『奴ら』の手駒でしかない」

「何なんだ。何なんだ、これは……！」

切断され短くなった左腕を、反対の手で押さえながら、叫んだ。

「だから、機械だと言っている」

男は、うるさいとでも言いたげな声で、つぶやく。

「機械……どうして、こんなものが」

「心当たりはあるだろう？ お前は、死んでいればそのまま救われるものを、『奴ら』によって生き返されてしまった。機械化された身体によってな。お前は、ある研究者達による改造手術を受けたんだ。その研究者とは、ベネグロワ直属の科学者だ」

「ベネグロワ、だと？」

「ああ。あの宇宙人類どもだ。……まあ、そんなことはどうでもいい。俺が聞きたいのは、」

お前は、今幸せか。

何故かそんなことを聞いてきた。

「幸せだよ」

精神は混乱の中に在りながらも、僕は、信じ続けてきたその言葉を
をはつきりと口にした。

「そうか」

男は頷くと、

「お前のその『幸せ』とやらは、単なる見せかけに過ぎない」

そう言っつて、僕の信じてきたものを、壊し始めた。

「見せかけ、だと……？」

その言葉を聞いて、僕は、初めて男に振り向いた。

「僕の幸せが、見せかけだと？」

怒気を含んだ声で、再び言っつた。

「そうだ。お前のその『幸せ』とやらは、ただ『奴ら』にプログラム
ムされたものに過ぎない」

「そんな、馬鹿な」

所詮戯言に過ぎない、と考えつつ、額からは汗が滲んでいた。

「『奴ら』は、お前の脳内麻薬の分泌をコントロールしているのだ。
機械化の代償として、不動の精神をお前に与えたのだ。つまり、お
前が幸せと感ずいても、それは結局作られたものに過ぎないのだ。今
まで不思議に思わなかったか？ 何故自分はこんなにも浮かれたま
までいられるのだろうか、と」

男の言葉が、頭の中で鐘のように反響し、その音色が真実である
ことを否応なしに感ずてしまう。

信じていたものが、灰になっていく。

「……光だ」

僕は、肩を震わせながらつぶやく。

「光のおかげなんだ！ あの光が僕を照らしたから、僕は幸せでい
られるんだ！」

「何を言っつている。……光だと？ なんだ、それは」

僕は、男に、自分の体験を、夢中で語った。それが真実であると、確かめたい一心から。

だが、話し終えた後、男は、
「そんなの神秘体験でも何でもない」

と、僕の信じてきたものを、踏み砕いた。最後のひとかけらまで。
「それはだな、お前が麻酔を打たれて眠っている間、脳だけが覚醒していて、そのような体験をしたように感
突然、頭から、何かが割れる音がした。
視界が、赤く染まる。どくどくと、身体中を何かが駆け巡っている。
る。

触覚が、聴覚が、視覚が 誰かに乗っ取られていく。身体が思うように動かない。

「あ、あ
自分が、消えていく。消されていく。

「ベネグロワに、気づかれたか。通信装置を壊しても、結局こうなるのか。自我機能を消失し、ただ兵器としての存在になってしまう。すまないな、ロゴス・ロイド。実はついさっきまでお前はまだ助かる見込みがあったのだが、たった今それがなくなった。少々話に時間をかけ過ぎたようだ。こうなってしまうては、もうお前を殺すしかない。このまま殺人兵器に成り下がるよりかは、ましだろう？ …… 良い眠りを」

最後にそんな機械じみた声を聞いた。男によって身体がずたずたに切り裂かれるのは、その一瞬後のことだった。

人形が力を失って、倒れた。人形の目は開かれていて、虚空を見つめていた。その目の奥には、幸せの欠片は一片も見出せなかった。ただ、口だけは嬉しそうに笑っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6288e/>

ベネグロワの滴り ~ 偽幸 ~

2011年10月5日02時54分発行